

念珠集

齋藤茂吉

青空文庫

1 八十吉

僕は維也納^{ウイenna}の教室を引上げ、笈^{きふ}を負うて二たび目差すバヴァリアの首府^{ミュンヘン}民^{ヘン} 顕^{ヘン} に行つた。そこで何や彼や未だ苦勞の多かつたときに、故郷の山形県^{かなかめむら}金瓶村^{むら}で僕の父が歿^{ぼつ}した。真夏の暑い日^{はたけ}ざかりに畑^{はたけ}の雑草を取つてゐて、それから発^{ほつ}熱^{ねつ}してつひに歿^{ぼつ}した。それは大正十二年七月すゑで、日本の関東に大地震^{おほ}のおこる約一ヶ月ばかり前のことである。

僕は父の歿^{ぼつ}したことを知つてひどく寂しくおもつた。そして昼のうちも床のうへに仰向に寝たりすると、僕の少年のころの父の

おもひで
想出が一種の哀調を帯びて幾つも意識のうへに浮上つてくるのを常とした。或る時はそれを書きとどめておきたいなどと思つたこともあつて、ここに記入する『八十吉』^{やそきち}の話も父に関するその想出の一つである。かういふ想出は、例へば念珠^{ねんじゆ}の珠^{たま}の一つ一つのやうにはならぬものであらうか。

八十吉は父の『お師匠様』の孫で、僕よりも一つ年上^{わらべ}の童であつたが、八十吉が僕のところ^{よみかき}に遊びに来ると父はひどく八十吉を大切にしたものである。読書^{よみかき}がよく出来て、遊びでは根木^{ねつき}を能く打つた。その八十吉は明治廿五年旧曆六月二十六日^{ひる}の午すぎに、村の西方をながれてゐる川の深淵^{しんえん}で溺死^{できし}した。

そのときのことを僕はいまだに想^{おもひうか}浮^{うか}べることが出来る。そ

の日は村人の謂ふ『酢川落ち』の日で、水嵩が大分ふえてゐた。川上の方から瀬をなしてながれて来る水が一たび岩石と粘土からなる地層に衝当つてそこに一つの淵をなしてゐたのを『葦谷地』と村人が称へて、それは幾代も幾代も前からの呼名になつてゐた。目をつぶつておもふと、日本の東北の山村であつても、徳川の世を超え、豊臣、織田、足利から遠く鎌倉の世までも溯ることが出来てあらう。『葦谷地』といふから、そのあたり一面に蘆荻の類が繁つてゐて、そこをいろいろの獸類が恣に子を連れたりなんかして歩いてゐる有様をも想像することが出来た。明治廿五年ごろには山川の鋭い水の爲めにその葦原が侵蝕されて、もとの面影がなくなつてゐたのであらうが、それでもその片隅の方

には高い葦が未だに繁つてゐて、そこに葦切よしきりがかしましく啼ないてゐるこゑが今僕の心に蘇よみがへつて来ることも出来た。その広々とした淵はいつも黝くろずんだ青い水を湛たたへて幾いくばく何深いか分からぬやうな面持おももちをして居つた。

瞳ひとみを定めてよく見るとその奥の方にはゆつくりまはる渦があつて、そのうへを不断の白い水泡みなわが流れてゐる。その渦の奥の奥が竜宮まで届いて居るといつて子ども話し合ふのは、彼等の親たちからさう聞かされてゐるためであつて、それであるから縦たとひ大人であつてもそこから余程川下かはしもの橋を渡るときに、信心ふかい者はいつもこの淵に向つて掌てのひらを合せたものである。その淵も瀬に移るところは浅くなつてその底は透とほき徹るやうな砂であるから、

水みづ遊あそびする童どう幼えうは白い小石などを投げ入れて水中で目を明あいてその拾ひろ競ひくらをしたりするのであつた。

旧暦の六月廿六日は『酢す川か落おち』の日であつたけれども、もう午過ぎであるから多くの人は散じてしまつて、恰あも祭礼のあとの様な静かさが川の一帯を領して居た。弱くて小さい魚は死骸しがいとなつて川の底に沈み、なかには浮いて流れてゐるものもある。割合に身が大きく命を取留めた魚は川下に下れる限り下つたのもあり、あるものは真水の出いづるところにかたまつて喘あへいでゐるものもある。さういふ午過ぎに十四ぐらゐを頭かしらに十又は九つ八つぐらゐまでの童が淵の隅の割合浅いところに水遊をしてゐた。水遊と云つてもふだんの日の水遊とは違つて、一方には底に潜つて行つて死んだ

小魚を拾ふのもその楽しみの一つなのである。間まが好よくば弱つて喘いでゐる大きな魚をつかまへることが出来たりするので、童らは何時いつまでも陸に上らうとはしない。

泳げるものは最も気味の悪い深いところまで泳いで行つて、渦のところを二まはり三まはりぐらゐ廻つて来るのが自慢の一番と謂いつてよかつた。すると淵の向う岸に八十吉がたつたひとり浅瀬のところでは何かしてゐるのが見えた。向う岸と云ふと童らの居るところからは平らな光つてゐる水面を中に置いて可へなりの距だりがある。八十吉は唯一人で小魚でも見つけて居るのかも知れんと思つてから五分間位も経つた頃であらうか。岸から少し淵に入つた鏡のやうな水面に人の両方の手が五寸ぐらゐひよいと出たのが見

えた。童らの驚く間もなく、人の両方の手が二たび水面から五寸ばかり出た。ほんの刹那せつなである。

そのとき十四になる童が水中に飛込んで泳ぎ出した。稍ややしばらく泳いでゐたが人の両手が水面から出たあたりに行著ゆきつくと、頭の方を下にして水中ふかく潜くぐつて行つた。その童の両の足の活潑な運動も見えなくなつて、いよいよ水中ふかく潜つて行つたことを観念すると、こんどはみんな息を屏つめて、小さい心臓の鼓動をせはしくしてそこの水面を見てゐた。水面は全く水の動揺を収めてこの事件を毫すこしも暗指あんじしてゐる様な気色けはひがない。やや暫しばらくすると、童はつひに空むなしく水面に浮上つて来て、しきりに手てのひら掌で顔なを撫なでた。その時である、はじめて事の軽々しくないとはいふ一種の不

安が僕らの心を圧して来て、そこに居たたまらないやうな気がした。童は二たび身を逆さかしまにして水中に潜つて行つた。けれども暫くののちまた手を空しうして水面に浮上つたとき、水面にあつて、人を呼べとこゑを立てた。それから童らはひた走りに走つて田畑に働いてゐる大人を呼びに行つた。

村の人々が数十人集つて、かはるがはる淵の中に飛込んだのは、人の両手が見えてから三十分ぐらゐも経つてゐたであらうか。大人が息こんで水中に潜るのであるが、八十吉はなかなか見つからない。入りかはり立かはり水中にもぐつて、また三十分間ぐらゐも経つた頃であつたらうか。一人の若者がたうとう八十吉を肩にかついで水面に浮上つて来た。若者は何か鋭く叫んで、その肩に

は生白い人の体がぶらさがつて、首の方がだらりとして腕などは日にからびた葱ねぎの白いところを見るやうな、さういふ光景が電光のごとくに僕に見えた。

『お関の婿だ。あれあ』

『お関の婿あ八十吉を見つけた』

かういふこゑが聞こえた。お関は村はづれに小さい店を開いてそこで揚物だの蒟こん蒟やく煮などを売つてゐた。八十吉を引上げたお関の婿といふのはそこへ他村から入婿に来た若者のことであつた。この若者は其その数年後隣村の火事に消防に行つて身を挺ぬきんじて働いたとき倉の鉢巻が落ちてつひに死んだ。八十吉が水の中からやうやく上つてから暫くは、人間の重苦しい鋭い一種の叫びご

ゑがそのあたり一帯にきこえて居たが、間もなく元の静寂に帰つた。

蔵王山ざわうざんの麓ふもとに湧出わきでる硫黄泉ゆじりの湯尻ゆじりが、一つの大きい滝瀬たきせをな

して流れてゐる。それが西に向つて里へ里へと流れ下つて、金瓶村ひがしざかひの東境ひがしざかひに出るとそこから急に折れて北へ向つて流れる。此

の川の川原かはらの石はいつも白い様な色合を帯びてゐて水苔みづこけ一つ生

えない。清く澄んだ流であるが味が酸いので魚も住まず虫のたぐひも卵一つ生むことをしない。又この水を田に引くと稲作いなさくに害

があるので、百姓にとつて此の川は一つの毒川だと謂いつてよい。

これを酢川すかはと何時いつの頃からか名づけて来た。それから、金瓶村の

西方を流れる川は米沢境よねざはさかひの分水嶺みづなげから出てくるもので、山形

の平野に出てから遂に最上川に入るのであるが、これは淡水であつて多くの魚類を住まはせてゐる。然るに昔、雨降の後に洪水が出た時、村の東境まで西へ向つて流れて来た酢川が、北へ折れる処で北へ折れずにそこを突破したから、村の西方を北へ流れてゐる淡水の川に、酢川の水が混つてしまつた。いはば西洋文字のHの様な恰好かつかうになつたのである。すると其の川に住んでゐる魚族が一度にむらがり死ぬといふ現象が起つた。さういふ害のある水が淡水の川に混つては困るから、村では破れたところに堤防を築いてその混入を防いだのである。然るにいつの頃からであらうか。時代はずつとずつと溯さかのぼるであらう。深夜人無きに乗じてその堤防を破つて、故意に酸い水を淡水の川に灑そそいだものがあつた。

その酸い水が混じると、魚の族は真黒になるほど群がつて川下へ川下へとくだる。それを梁やなで取れるだけ取つて、暁にならぬうちに家に帰つて知らんふりしてゐるのである。これを『酢川すか落ち』と唱へる。

暁に先立つて草刈くさかりに行く農夫の一人二人がそれを見つけて、村役場へ届ける。村役場では人足にんそくを出して堤防の修理をする。然るに一方では村の老若男女童男童女が我先にと川へ出かけて行つて、弱り切つてゐる魚を捕まへるので、つまり余得よとくにありつくのである。この『酢川落ち』はさうたびたびは無い。また村人も一種の楽しみとおもふので、役場がそれを大目に見て、罪人を発見しようとするやうなことはない。『酢川すかおとし』の行為は法に

触れるべきものであるが、『酢川おち』の現象は村民にとつては無くしてはならぬ、謂はば一つの年中行事の如き觀を呈するに至つた。それがずつとずつと古い代から続いて来たのである。泳およぎを知らない、常には川遊などをしない八十吉が、この『酢川おち』の日に、ただのひとりで川に遊びに来てゐたのである。

八十吉は終つひに蘇らなかつたことを下男が来て話して呉れた。八十吉のこの事があつた時父は他村に用足しに行つて、日暮時に入つてやうやく歸つて来た。父の顔を見るや否や、あわてて僕は父の側に行き、八十吉の溺おほれる有様、それから八十吉を水から揚げてから、藁火わらびをどんどん焚たいて、身の皮のあぶれる程八十吉を温めたこと、八十吉の肛門かうもんから煙管きせるを入れて煙草たばこのけむりを骨折

つて吹き込んだこと、さういふことを息をはずませながら話をした。

『八十吉の尻けつの穴けつさ煙管が五本も六本もずぼずぼ這入はひつたどつす。ほして、煙草の煙けむが口からもうもう出るまで吹いたどつす』

かういふ僕の話聞いてゐた父は、どうしたのか一ことも云はずにいきなりと僕をにらめつけるやうな顔をして、僕は予期しない父の此の行為に驚きやう愕がくするいとまもなく、父はあたふたと著き物の著換へて出て行つてしまった。祖母も母もみんな八十吉の家につめ切つてゐた時である。

僕は父の歿した時、民ミン頭トウの仮寓かぐうにあつてこのことを想出おもひだして、その時の父の顔容を出来るだけおもひ浮べて見ようと努めた

ことがあつた。帰国以来僕は心に創痕きずを得て、いまだ父の墓参をも果さずはたにゐる。家兄の書信に拠よると八十吉は十二で死んでゐるから僕の十一のときであつた。八十吉は金瓶村宝泉寺に葬られてあつて、円阿香彩童子といふ戒名をもつてゐる。（大正十四年九月記）

2 痰

父は長い間、痰たんを煩わづつてゐた。小男で瘦やせた父が咳せき込んで来ると、少し前かがみになつて、何だかお腹なかの皮かわでも振よぢれるやうに咳せき込むのがいかにも苦しさうであつた。ところが、その苦しさうな

咳が一とほり済むと、イツへ、イツへ、イツへ、イツへといふ咳が幾つか続いて、それから、イツシ、イツシ、イツシ、イツシといふ咳になる。その工合がどうもをかしいので、幼童の僕がその真似まねをしたものであつた。仏壇の勤めなどがまだ終らぬうちに父が咳込んで来てさういふ異様な咳になると、勝手に働いて母の傍にくつついてゐながら僕がイツシ、イツシ、イツシ、イツシといふ真似をして、母から睨にらまれたりするけれども、母もたうとう笑つてしまふのであつた。

年に一度、多くは冬を利用して人形芝居が村にかかつた。夕飯を終へてから、翁をうあう媪をんなも、婦も孫も、みんな、深く積つた雪がかんかんと氷る道を踏んでその人形芝居を見に行つた。時にはひど

い吹雪の夜のことなどもあつた。その人形芝居には、美しい娘をさらつてゐる大猿を一人の侍さむらいが来て退治したり、松前屋五郎兵衛ごろべゑが折檻せつかんされて血を吐いたり、若い女房がひとりの伴を連れて峠を上つて行くと、そこに山賊さんぞくが出て来たりした。杉の木立の向うは暗闇くらやみで星が輝いてゐるやうにも拵こしらへてあつた。ある晩に父は僕を背中に負つてその人形芝居を見に行つたときにも、父はひどく咳込んでいかにも困つた様子であつたが、僕がまたその真似して、それでも穉をさなごころに悪いことをしたやうな気持であつたことをおぼえてゐる。

父の痰持たんもちは僕の生れる前からであつた。祖父が隠居してから楽しみに飼つた鯉こひが、水が好いので非常に殖え、大きな奴がいつも

沢山泳いでゐた。雪がもう二三度降つてからのことであつたさうである。大雪にならぬ前に、その鯉池の浚さらひをする方がいいといふので、寒さの厳しい日に父は若者を督促して働いたのが本もとで、たうとう痰になつてしまつたといふことであつた。痰になつてからも父はやはり働いてゐた。僕の生れたのは父が痰になつてから後のことである。僕は小さい時は腺せんびやうしつ病質でひよろひよろしてゐた。父が痰でなやんでゐたときの子だからだなど祖母の云ふのを聞いたことがある。

父は痰持であつたから、水飴みづあめだの生薑しやうがの砂糖漬さとうづけなどを買つてしまつて置いた。水飴は隣の宝泉寺からよく貰もらつて来たやうである。宝泉寺では村人が餅もちを搗つくたびに持つて行くので、餅の

食べきれないときにはそれを水飴に作つた。いつか宝泉寺では、琥珀色こはくの透とほる水飴が甕かめに一ぱいあるのを持つて来て分けて呉れたことを僕は覚えてゐる。父の居ないときに時折兄と僕とがその水飴を盗んで嘗なめた。

或る時僕は生薑の砂糖漬をも盗んで来たことがあつた。そして砂糖だけを嘗めて生薑を外すに棄てた。外には雪が一めんに降積つて居る。生薑が雪の上におちると三四の雀すずめが勢よく飛んで来てそれを争つたことをおぼえてゐる。痰と生薑とに何かの因縁いんねんがあるやうにも思へたがそれが穉をさない僕には分らない。それから大分経たつて僕は東京にのぼるやうになり、好んで浪花節なにはぶしを聞いた。

浪花節かたりは、『せめて生薑の一へげも』といふことをうたふ。

その度ごとに僕は父の痰のことを追憶した。医学を学んでから僕は漢方かんぽうまたは民間医方いほうに興味をもつたこともある。さて生薑せいしょうのことを注意するに、『思邈しぱくの云いはく。八九月に多く食へば、春にいたりて眼を病む。寿いのちを損じ筋力を減らす。妊婦はらみをんなこれを食へばその子六指むつゆびならしむ』なんぞと説明したのもあつて僕を驚かしたが、多くの漢医方には、生薑せいしょうに開痰かいたんの作用あることが説いてある。痰火たんくわの条くだりに薑汁きやうじゆを用ゐることもあり、治寒痰咳嗽ぢかんたんこくしやくといふ句もあり、導痰丸だうたんぐわん、導痰湯たうなどの処方もあるので、父が砂糖生薑せいしょうをしまつてゐたことが、何だか一種あはれの哀あはれふかいたやうな氣持きぢで僕の心に浮んでくることもあつたのである。

父は三山さんざんや蔵王山ざわうざんあたりを信心しんじんして一生しそく四足しそくを食はずにし

まつた。僕の寝小便がなかなか直らぬので、牛ぎゅうが好い、馬ばが好い、犬いぬが好いなどと教へて呉れるものがあつたが、父はわざわざ町まで行つて、朝鮮人にんじん 蔘 二三本買つて来てくれたことをおぼえて居る。それであるから、兄が十五になつて、若者仲間に入つてから間もなく、大雪が降つてその固まつた或る晩に、鮭さけの頭に爆発する為掛しかけをして、狐きつね六足びきを殺した。六足の狐は銘々行くところに行つて死んでゐたさうである。垂れてゐる血たどを辿つて行くと其処そこに狐が死んでゐるので、一つなどはそれでも、林の中の泉の傍まで行つてゐたさうである。兄達五六人の若者は夜業わらしごとの藁わら為事ことが済んでからそれを煮て食つた。兄は爆発為掛うまの旨うまく行つたことを得意に話しながら、どうも少し臭くて駄目だな。牛ぎゅうよりも旨うまくな

いな。こんなことを話した。それを次の日父が聞きつけて非常に怒り、何でも狐のことをひどく勿体無もったいながつたことをおぼえてゐる。

父は痰を病んでから、いつのまにか何かの神ぐわんに願を掛かけて好きなものを断ちつことを盟ちかつた。ただ、酒も飲まず煙草たばこも吸はぬ父は、つひに納なつとう豆を食ふことを罷やめた。幾十年も納豆を食ふことを罷めて、もう年寄になつてから或る日納豆を食つたが、どうも痰に好くない。また痰がおこりさうだなどと云つたことがある。父はその時から命のをはるまで納豆を食はずにしまつただらうと僕はおもふ。父は食ぎよにくべものの精しやうじん進しんもした。併しかしさういふ普通の精進ぎよにくの魚ぎよにく肉を食はぬほかに穀断ごくだち、塩断しほだちなどもした。みんなが

大根を味噌で煮たり、鮭の卵の汁などを拵へて食べてゐるのに、父はただ飯に白砂糖をかけて食べることもあつた。併し僕には何のために父がそんな真似を為るかが分からなかつた。

3 新道

六歳ぐらゐになつた僕を背負つて、父は早坂新道を越えて上^{かみのやま}山へ向つて歩いた。雨あがりの道はよく固まつて、天がよく晴れても塵の立ちのぼるやうなことはない。両側に密生した松林がしばらくの間続いてゐて寂しいやうである。人どほりの^{すくな}朝のうちで、街道は曲折のなるべく無いやうについてゐるから、

遙か向うから人の来るのが見えてその人に逢ふまでには大分か
 かる。それからその人が後の林の角に見えなくなるまでも大分か
 かる。さういふ街道を父はいい気持で歩いて行つた。時節は初夏
 の頃ではなかつたらうかと思はれる。さういふ記憶は朦朧とし
 てゐるが、松蟬でも鳴いてゐたやうな気持もする。

上^{かみのやま}山

は温泉場で、松平藩主の居城^{きよじやう}のあつたところであ

る。御一新^{ごいつしん}後はその城をこはして、

今では月岡^{つきをか}神社の鎮座に

なつてゐる。後年俳人の碧梧桐^{へきぎとう}が

ここを旅して、『出羽^でで最上^{もがみ}

の上^{かみのやま}山

の夜寒かな』といふ句を残した。僕の村からこの広い

新道を通つて上山まで小一里ある。そこまで村の人が大概買物な
 どに行つた。

さういふ街道を父は独占したやうなつもりで街道の真中まんなかを歩いて行つた。然るに稍ややしばらくすると、僕のうしろの方で人力車じんりきの車輪しやの軌きる音がした。さうしてへエ、へエ、といふ懸声かけごゑがした。これは避よけろといふ合図に相違ないから、父は当然避けるだらうとおもつてゐると依然として避けない。その刹那せつなにどしんといふ音がして人力じんりきの梶棒かぢぼうがいきなり僕の尻のところにあつた。父は前にのめりさうになつた。

すると父は突嗟とつさに振向きしなに人力車夫うなじの項のところをつかまへて、ぐいぐい横の方に引いたから人力車がくつがへりさうになつた。人力車夫は慌しく梶棒をおろさうとしたが父はなほ攻勢をゆるめない。人力車夫はつひに左方になつて倒れた。父は人力車

夫の咽のどのあたり頃のあたりを二三度こづいたが、それでも人力車夫は再び起き上つて父と争はうとした。そのとき乗つてゐた老翁が頻しきりにそれを止め父に詫わびをした。

父は威張つた恰かつかう好で尻を高くはしより再び街道の真中を歩いた。その老翁を乗せて後から来た人力車は今度は僕らを避よけて追越して行つた。追越すときに車夫は何か口の中で云つてゐたが父はそれにはかまはなかつた。僕は事件のあつた時父の背中で声を立てて泣いたことをおぼえてゐる。

僕は明治四十二年に熱を病んで、赤十字病院の分病室にゐたとき、終日少年の頃の回想に耽ふけつたことがある。そしてなぜあの時、人力車夫が梶棒をあんなにひどく突当てたであらうと考へた

ことがある。この文章を書いてゐる現在の僕がやはりそのことを思ふのと同じであつた。

この街道の開通されるまでは、小山を幾つも越えて漸く上山やうやかみのやに行著まゆきつくのであつた。そこは如何いかにも寂しい山道で、夜遊よあそび

に上山まで行く若者が時々道が分からなくなつて終夜そのあたりをさまよふといふやうなことがあつた。上山から魚を買つて夜道きつとすると屹度道きつとが分からなくなるといふこともいはれた。夜更けてから、ほうい、ほうい、といふこゑがその山道あたりから聞こえるのはさう稀まれなことではなかつた。

一つの小山の中腹に大きな石が今でもある。それを狼おほかみいし石いしと称となへてゐるのはそこには狼が住んでゐて子を生むと、村の人が食

べ物を持つて行つてやる。小さい狼の子が出て来て遊ぶといふやうなことがあつて、夜半などに鋭い狼のこゑがよく聞こえたものださうである。その石の近くを上山へ行く山道が通つてゐた。この山道には狐狸こりの变化へんげに関する事件がなかなか多く、母も度々さういふ話をした。

そこへ御一新ごいつしんが来、開化のこゑがかういふ山の中にも這入はひつて来るやうになつた。三島県令みしまが赴任するとたうとう小山の中腹を鑿きりひら開いて山形から上山を経て米沢よねざはの方へ通ずる大街道が出来た。早坂新道と村の人が称とこなへたのはこの新道である。この新道は僕の生れるずっと前に開通されたものだが、連日の人足にんそくで村の人々の間にも不平の聲が高かつた。ある時、県令の臨場りんぢやうの

際に人足に寝そべつてゐる者のあるのを役人が咎めると、『人と
 してねぶたきことはあるものを吾にはゆるせ三島県令』といふ一
 首を差上げたなどといふ逸話も伝へられた。その男は僕が東京に
 来てからも年取つて未だ存命して居つたが余程前に亡くなつた。
 さて新道が出来ると人力が通る。荷車は干魚などを積んで
 通る。郵便脚夫が走る。後には乗合馬車を通り、新発田の第
 十六聯隊も通つた。たまには二頭馬車などの通ることもあり、
 騎馬の人の通ることもある。珍らしいものの通るときには、宝泉
 寺まで走つていつて遠目鏡でそれを見た。

人力車夫が此の大街道を勢づいて走つてゐるときには心中に一
 種の誇があつただらう。恰もヴァチカノの宮殿を歩いてゐるとき

に何か胸が開くやうに感ずるが如きものである。僕の父にしてもさうである。父がこの大街道を独占したやうにして歩いてゐたときには、そこにやはり不意識の矜きよう尚やうがあつたに相違ない。父の剛愎がうふくな態度は人力車夫の矜尚の過程に邪魔をしたから、梶棒をどしんと僕の尻に突当てたのである。その不意打ふいうちの行為が僕の父の矜尚の過程に著しい礙さまたげを加へたから父は忽然こつぜんとして攻勢に出でたのではなかつたらうか。

4 仁兵衛。スペクトラ

仁兵衛にへゑは謡うたひの上手で、それに話上手であつた。仁兵衛はいつも

日の暮方になると丘陵にのぼつて川に沿うた村だの山ふところに点在してゐる村だのを眺める。村の家から豊かに煙の立ちのぼるのを見極めると、仁兵衛はいつも著換きがへしてその家に行く。その家には必ず婚礼があつた。祝言しうげんの座しやうに請しやうぜられぬ仁兵衛ではあるが、いつも厚きやうく饗きやうせられ調法におもはれた。仁兵衛は持前の謡をうたひ、目出度めでたや目出度を諧かいぎやく 謔やくで収めて結構な振舞ふるまひを土産に提げて家へ帰るのであつた。村の人々はその男を『煙仁兵衛』と云つた。

その仁兵衛が或る夜上等の魚を土産に持つて帰途に著くと、すつかり狐だまに騙だまされてしまふところを父はよく話した。どろどろの深田に仁兵衛が這入はひつて酒風呂さかぶろのつもりである。そして、『あ、

上じやうかん爛だあ、上爛だあ』と云つてゐるところを父は話した。そのところまで来ると父のこゑに一種いきほひの勢が加はつて子供等は目を大きくして父の顔を見たものである。父は奇蹟を信じえうくわいへ妖怪變化んげの出現を信じて、七十歳を過ぎて此世を去つた。

寺小屋が無くなつて形ばかりの小学校が村にも出来るやうになつた。教員は概ねおほむ士族の若者であつた、なかには中年ものも居た。『窮理の学』といふことがそれらの教員の口から云はれた。父は冬の藁わらしご為事の暇に教員のところこゝろに遊びに行くと、今しがた届いたばかりだといふさんり三稜鏡りやうきやうを見せられた。さうして日光といふものは斯かうして七色の光から出来て居る。虹にじの立つのはつまりそれだ。洋語ではこれをスペクトラと謂いつて七つの綾あやの光といふ

ことである。旧弊ものは来迎らいがうの光だの何のと謂ふが、あれは木で偶法印くほふいんに食はされてゐるのだ。教員は信心ぶかい父のまへにかう云つて気焰きえんを吐いた。

父は切りしきにその三稜鏡をいぢつてゐたが、特別しかけに為掛しかけも無く、からくりも見つからない。しかしそれで太陽すかを透すかして見ると、なるほど七綾りようの光があらはれる。

父は暫しばらく三稜鏡をいぢつてゐたが、ふと其それを以もつて炉の火を覗のぞいた。すると意外にも炉の炎がやはり七つの綾になつて見える。父は忽たちまち胸むねに動悸どうきをさせながら、これは、きりしたん伴天連ばてれんの為業しわざであるから念力で片付けようと思つた。

教師様。お前はきりしたん伴天連だまに騙だまされて居るんではあんま

いな。これを見さつしやい。お天道てんたうさまも、ほれから囲炉裏のおきも、同じに見えるのがどうか。からくりが無いやうにして此の中に有るに違ひないな。きりしたん伴天連おれの念力でなくなれ。

かういつて、父は三稜鏡をいきなり炉の炎の中に投げた。教員は驚き慌ててそれを拾つたが、忿怒ふんどすることを罷やめて、やはり父がしたやうに炉の炎をしばらくの間三稜鏡で眺めてゐた。教員は日光と炉の焚火たきびと同じであるか違ふものであるかの判断はつかなくかつた。教員の窮理の学はここで動揺した。父は威張つてそこを引きあげた。

後年父は屢しばしばその話をした。文明開化の学問をした教員を負かし

たといふところになかなか得意な気持があつた。けれども単にそれのみではなかつたであらう。神を念じて穀断こくだち塩断しほだち断してゐたやうな父は、すぐさまスペクトラの実験の腑ふにおちよう筈はずはないのである。腑ふに落ちるなどと謂いふより反撥はんぱつしたといつた方がいかも知れない。

それからずつと月日が立つて、父は還暦を過ぎこき古稀をも過ぎた。父は上山町のとある店先で、感に堪へたといふ風で、蓄音機の喇叭ツバから伝つてくる雲右衛門くもゑもんの浪花節を聞いてゐたことがある。けれども、父はその蓄音機は窮理の学に本づくものだといふことなどは追尋つゐじんしようともしなかつた。スペクトラを退治した写象なども無論意識のうへにのぼつて来なかつたのである。

5 漆瘡

村の学校が隣^{りんそん}村の学校に合併されて、そこに尋常高等小学校の建つたのは、森文部大臣が殺されて、一二年も経つたころであつただらう。

学校まで小^こ一里あつた。雪の深い朝などには、せいぜい炭つけ馬が一つ二つ通るぐらゐなところで、道がまだ附いてゐない。雪が腰を没すといふやうなことは稀^{まれ}でなかつた。子供等は五六人固まつてその深雪を冒して行くのであるが、ひどく難儀をしたものである。途中で泣出して学校に行著くまで黙らなかつた子なども

みた。

けれどもそこを辛抱すれば、柳に銀色の花が咲くころから早春が来て、雪の降るのがだんだん少くなつて来る。それから一月も立てば、麗うららちかな天気ゆきどけが幾日も続いて、雪がおのづと解けてくる。道は『雪解みち』になつて、朝のうちは氷つても午過ぎひるからは全くの泥道で、歩くのにまた難儀なのが幾日も幾日も続く。さういふ時には草鞋わらぢは毎日一足ぐらゐづつ切れた。八つか九つになつた僕はかうして毎日学校へ通つた。

それを通越すと、道の片隅の方などに乾いたところが見え初めてくる。それが日一日と大きくなり、向うの方に見えてゐた乾いたところと連続してしまふ。さういふ土の乾いたところを、子ども

も達は『草履道』と云つて、そこを踏んで躍をどりあ上がつて喜んだ。

街道の雪が消え、日あたりの林の雪が消え、遠山を除いて、近在の山の雪が消えると、春が一時に来てしまふ気持である。太陽はまばゆいやうに耀かがやく。木の芽がぐんぐん萌もえはじめ。苞つとをやうやく破つたばかりの、白つぽいやうな芽だの、赤味を帯びたやうなものだの、紫がかつたものだの、子供等は道ぐさ食ひながらさういふ木の芽をぽきりと摘んで口の中で弄もてあそぶものもある。雲雀ひばりは空気を震動させて上天の方にゐるかとおもふと、閑古鳥かんこどりは向うの谿間たにまから聞こえる。檜なら、櫟くぬぎの若葉が、風に裏がへるころになれば、そこに山蚕やまこが生れて、道の上に黒く小さい糞ふんを沢山おとすのであつた。

五六人総勢十人ぐらゐの子供等が、さういふ日に恣ほしいままに道草を食つて毎日おなじ道を往わうへん反する。蟻ありの穴に小便をしたり、蛇を殺してその口こうちゆう中かへるに蛙を無理におし込んだり、さういふ悪いたづら戯わらをしながら、時間が迫つてくると皆学校まで駈出して行つた。

然しかるにそれらの子供を威圧してゐる童子がひとりゐた。年はそのころ十一ぐらゐであつた。年かさも大きいし猛烈なところがあつて、村の学校の子供等を征服してゐた。周囲の子供等を引率して学校の授業も何もかまはずに山や沢に出掛けるので、そのやり方が何処どこか猛烈なところがあつた。一度教員は忿怒ふんどして学校の梁は木りきにその童子をつるして折せつ檻かんしたことがある。それは森文部大臣が東北の学校を視察して、山形から上山に行くために早坂新道

を通られるといふ日であつた。僕は文部大臣を敬礼するために四五日の間その稽古けいこをし、滅多ほに穿くことのない袴はかまを穿き、中にはこれも滅多には著ぬ襯衣しやつを著たりなどして学校に行つたのであつたが、童子は何時いつの間にかさういふ子供等を引率して山に遊びに行つてしまつた。それであるから、文部大臣を敬礼する時がだんだん近づいてくるのに子供等が歸つて来ないといふのであつた。併し文部大臣の敬礼がどうにか間に合つて、僕等は早坂新道に整列し、人力車で通つた文部大臣森有礼に小さいかうべをさげた。教員はその日は平穩な風をしてゐた。が、次の日にその童子を学校の梁木つるに吊して、鞭むちで続けざまに打つてみんなに見せたのであつた。それから間もなく森文部大臣が殺されたのだといふやうな

気がする。さういふことは総てまだ学校の合併されない前のことである。学校が合併されてからは、その童子もやはり学校に通つて、おのづから周囲の子どもを威圧してゐた。

美しく晴れた朝、その童子は僕らを合せた七八人の中心になり、思ふ存分道ぐさを食ひながら学校へ出掛けて行つた。硫黄泉を源とする酢川すかはの橋から石を投げたりなんぞして、しばらく歩くと、道端に五六本の漆うるしの木がある。これは秋には真赤まつかに紅葉したのであつたが、今は小さい芽が枝の尖端せんたんのところから萌えいでてゐる。

その漆の木のところに行くとき、童子はみんなに列ならぶやうに言附けた。そして自分で漆の芽を摘み取ると芽の摘つみぐち口から白い汁が

出て来た。童子はみんなに腕をまくらせて、ぜんはく前膊の内面のところ
 に漆の汁で女陰と男根とを画ゑがいた。女陰などといふとすさまじ
 く聞こえるが、実は支那の古篆こてんの『日』の字のやうなかつかう恰好をし
 てゐるものに過ぎない。男根でもさうである。皆 [Pra:putium]
 などが無く思ひきり単純化されたものである。中江兆民はがん癌に
 罹かかつて余命いくばくもないといふとき、「一年有半」といふ随筆
 を書いた。そのなかにたし慥か、『陰陽二物』の何のと云つて日本国
 をけな貶してゐたとおもふが、あれは無理だ。羅馬ロオマは無論巴里パリに行つ
 ても、ロンドン倫敦、ベルリン柏林に行つても、さういふ邪氣の無い絵はいく
 つも描いてある。この童子もただ邪氣の無い絵をかいたに過ぎな
 い。童子はそれでも漆の芽を幾つか取換へたりなどしてそれを描

いた。描いて貰もらふと皆みんなが声を挙げて笑つた。そして汁の乾くのを促すために息を吹きかけたりなどした。

大小いろいろと描いて来て、僕の腕に小さいのを描いてくれた。それは今からおもへば降誕八日めに割かれれいした耶蘇ヤソの男根のやうな恰好であつたとおもへばいい。童子は最後に自分の腕に思ひ切り大きいのを描いておしまひにした。

次の日の朝みんなが集まつて腕の絵を見せ合つて大声で笑つた。絵のところだけが黒くなつて乾いたから、きのふに較くらべてはつきりして来てゐる。然るに僕のだけは絵のところ黒くならず赤くなつて少し腫はれあがつてゐる。

その次の朝もみんなが絵を見せあふと、絵のところ益々益々々 《ま

すます》黒くなつて乾いてゐるのに、ただ僕のははゆうべから癢味かゆみが増して来、それに痛味いたみが加はつて絵のところから汁が出はじめた。僕は授業をうける時にも癢いのと痛いのとでなやんで居た。さうすると、沢蟹さはがにをつぶしてつけると直るといふものがあつた。学校の裏は直ぐ沢になつてゐて、石を一寸避ちよつとけると小さい蟹を幾つも捕へることが出来る。僕はそれをつぶして臟腑ざうふをかぶれかかつてゐる腕になすりつけたけれども、赤く腫はれて汁の出て来たところは今度は結痂けつかして行つた。

絵のところだけが黒く結痂したから、直つたのかといふとさうでない。それだから風呂ふろに入つた時などに、秘ひそかにその痂かさぶたを除いてみると、その下は依然として爛ただれて居つて深い溝みぞのやうになつ

てゐる。そして次の日には二たびそこに結痂けっかするといふ具合でなかなか直らない。ほかの子供等は、さういふ女陰・男根図のことなどはいつのまにか忘れて行つた。それはその筈で描いて貰つてからすでに一ヶ月余も経過したのであるから剥はげて取れてしまつたのが多かつた。縦たとひ残つてゐてもそんなものはもう珍らしくはなかつた。ただ僕ひとり毎日そのことで苦しんだ。そして痛いのを我慢して痂を除いてはそこに蟹の臓腑をつけてゐるに過ぎなかつた。痂を取つたところの溝がだんだん深くなるのに氣付いてもそれを母や父に打明けることが出来ない。僕は空むなしく二月を過ぎごした。

けれども、或時たうとうそれを母から見付けられその成行を一

々白状してしまつた。母は僕を父のところ連れて行つた。僕は恐る恐るすでに結痂した男根図を父に見せた。父も母も共に笑つた。叱しかられるつもりのところ叱しかられなかつたので僕も大きなこゑを立てて笑つた。その晩に父はどろどろした油あぶらぐすり薬のやうなものを拵こしらへて来て塗つて呉れた。さうすると二三日で痂が取れて行つた。そこへまた油薬のやうなものを塗つて呉れた。ひどく苦んだ漆瘡しつさうの男根図はかくのごとくにしてつひに直つた。瘡かさは極く『平凡』に癒いえた。

『はじめは脱兔だつとの如く』と云つておいて、そして、『をはりは処し女よぢよのごとし』と云ふあたりは、味あぢはつてみるとどうも旨うまいところがある。ただ余り陳腐になつてゐるから、今までそれを味はぬの

であつた。その陳腐さは、レオナルド・ダ・ヴィンチの画ゑがいた、
モナ・リザ・ジヨコンダの像のやうなものであつた。そして僕の
漆しつさう瘡物語の結末が消えるやうにして無くなつてしまつたときに、
この諺ことわざ、警句をおもひ起したのであつた。おもひ起して味つてみ
るとどうも言方に旨いところがあつた。僕は心中ひそかに満足を
おぼえた。レオナルド・ダ・ヴィンチをおもひ起したのはかうい
ふ訣わけである。

『凡そ児童はその父の能力に就いてどう思惟してゐるか』といふ
ことに就いて、ある時期には児童は父の万能を信ずることがある。
さて時が経つと、児童のまへには父は追々と平凡化されて行く。
僕の父もその数に漏れなかつた。僕が少しづつ大きくなるに連れ

て僕の父も益 平凡化されたから、父が三稜鏡を炎のなかに投じた話などをして僕も心中感服したことはない。然るに僕が漆瘡しつさきであれほど苦しんだ時に、父は極めて平凡にそれを直して呉れた。僕はその時、父には何か知らんやはり特殊の『能力』があるのではあるまいかと思つたのである。ここで父の平凡化は別な色いろあひ合を以て姿を変へたのであつた。それから『平凡治癒』といふ概念である。これは実地医家は必ず思おもひ当あたるに違ひない。疾やまひは幾ら骨折つても癒えぬときがある。さうしてゐて癒ゆるときには極めて平凡に癒えてしまふ。即ち疾を『平凡治癒』の機転に導くのが名医である。

彼の童子から漆の汁で描いて貰つた絵がかぶれて二月も苦しん

だけれどもそれは癒えた。癒えたが痂かさぶたを結んだところが癩ばんこん痕組織で補はれたと見えてそこに痕あとが残つた。その小さい男根凶の痕は、小学校を出て中学校に入り中学校を出て高等学校に入るころまでは残つてゐた。僕は風呂に入つたりするとその痕を凝視して追憶にふけることもあつた。然るにその痕はいつのまにかおぼろになつて行き今ではもはやその形を認めることが出来なくなつた。僕もそろそろ初老期へ近づいて来た。南独逸ドイツの客舎で父の死報に接した時も僕は忽然こつぜんとして漆瘡のことを想出おもひだし、床のなかで前膊の内面を凝視したけれども形はすでになくなつてゐた。

漆瘡に、生蟹黄調塗とか、蟹沫塗之とか、または蟹殻滑石研細
 ※之乾者蜜和塗などといふ療方のあるのは漢医方に本づくのであ

つた。和文に漆まけを癒いやしとあるのも亦またさうである。父の拵こしらへて呉れたものはそんなものではなかつた。油薬のやうなどろどろしたものであつたが、その薬の色やなんかはどうしてもおもひ起すことが出来ない。そのあたりの父の顔も分からない。努めておもひ浮べようとすると、晩年の老いた父の顔のみが浮んでくるのである。

6 初詣

明治二十九年に丁度僕が十五になつたので、父は湯殿山ゆどのの初はつ詣まに連れて行つた。その時父は四十五六であつただらうから現

在の僕ぐらゐの年であるがもう腰が屈まがつてゐた。これは田畑に体
 を使つたためであつた。しかしそれまで幾度となく湯殿山に参さんけ
 詣いし道だうちゆう中自慢じまんであつた。

僕も父もしばらくの間毎朝水を浴びて精進し、その間に喧嘩けんくわ
 などを避け魚介虫類のやうなものでも殺さぬやうにし、多くの一
 厘錢を一つ一つ塩で磨いて賽錢さいせんに用意した。参詣さんけいというても今
 時のやうに途中まで汽車で行くのではない。夜半にならぬ頃に出
 立して夜の明けぬうち五六里は歩くのである。第一日は本道寺ほんだうじ
 といふところに泊つた。そこまでは村から行程かうてい十四里である。
 第二日は、まだ暁にならぬうちに志津しづといふ村に著いて、そこで
 先達せんだつを頼んだ。それからの山道は雪解ゆきどけの水を渡るといふやう

なところが度々あつた。まだ午前であつたが、湯殿山の谿合たにあひに
 かかると風の工合があやしくなつてきてたうとう『御山』おやまは荒れ
 出して来た。豪雨が全山を撫なでて降つてくるので、笠かさは飛んでし
 まひ、塵ごしやもちぎれさうである。大木の枝が目前でいくつも折れた。
 それでも先達せんだつはひるまずに六根ろくこん清浄御山しやうじやうおやまはんじやう繁盛と唱へて
 行つた。さうするうち、渡るべき前方の谿は一めんの氷でうづめ
 られてそれが雨で洗はれてすべすべになつてゐる。下手しもての方は深
 い谿に続いてひどくあぶないところである。僕は恐る恐るその上
 を渡つて行つたが、そこへ猛風が何ともいへぬ音をさせて吹いて
 来た。僕は転倒しかけた。うしろから歩いて来た父は、茂吉もきち匍へ。
 べたつと匍へ。鋭い声でさういつたから僕は氷のうへに匍つた。

やつとのことでしがみ付いてゐたといふ方が好いかも知れない。
さういふことを僕はおぼえてゐる。

『語られぬ湯殿ゆどのにぬらす袂たもとかな』といふ芭蕉の吟のあるその湯殿の山に僕は参拝して、『初はつまり』の願ねがひを遂げた。鉄かねの鎖かで辛うじて谿底の方へくだつて行つたことだの、それから、谿間の巖いはから湯が威勢よく湧わいてながれてゐるところだのをおぼえてゐる。もどりに志津しづに一泊して、びしよぬれの衣服をほした。この日の行程十六里と称へられてゐる。

第三日は、麗うららかな天氣に歸路に就いた。七八里も来たころ、父は茶屋に寄つてぬた餅もちを注文した。ぬた餅と謂いふのは枝豆を搗すり鉢ばで搗すつて砂糖と塩あんばいで塩梅あんばいをつけて餅にまびつたものである。

父は茂吉なんぼでも食べろと云つた。それから道中をするには腹こしらを拵へなければ駄目である。山を越す時などには、麓ふもとで腹を拵へ、頂上で腹を拵へて、少し物を持つて出懸けるといいなどといつてなかなか上機嫌であつた。

もう山やまがた形の街まちも近くなつたころ、当時の中学校で歴史を担任してゐる教諭の撰した日本歴史が欲しくなり、しきりにそれを父にせがんだ。その日本歴史は表の様に出来てゐて工面のいい家の子弟は必ず持つてゐたし小学校でも先生がそれを教場に持つて来たりするので、僕は欲しくて欲しくて溜たまらなかつたものである。然るに父はどうしてもそれを買つて呉れない。僕らは山形の街に入つた。僕は幾たびも頼むが父は承諾しない。そのうち、書物の

発行書店のまへを通りすぎてしまった。僕はなぜ父はそんなに吝しよくだらうかなどと思ひながら父の後ろを歩いたのであつた。

7 日露の役

日露戦役であつたときには、僕はもう高等学校の学生になつてゐた。日露の役には長兄も次兄も出征した。長兄は秋田の第十七聯隊から出征し、黒溝台こくこうだいから奉天ほうてんの方に転戦してそこで負傷した。その頃は、あの村では誰だれ彼かれが戦死した。この村では誰彼たけなはが負傷したといふ噂うはさが毎日のやうにあつた。恰あたも奉天の包圍戦かが酣たけなはになつた時であつたらう。夜半を過ぎて秋田の聯隊司令部か

ら電報がとどいた。そのとき兄嫁などはぶるぶるふるへて口が利けなかつたさうであつた。父は家人の騒ぐのを制して、袴はかまを穿きそれから羽織きを著た。それから弓張ゆみはりを灯ともし、仏壇のまへに据わつて電報をひらいたさうである。そのことを僕が偶々《たまたま》帰省したりすると嫂あねなどがよく話して聞かせたものである。

父は若いころ、田植をどりといふのを習つてその女をんな形がたになつたり、堀田ほったの陣屋があつた時に、農兵になつて砲術を習つたり、おいとこ。しよがいな。三さがり。おぼこ。木挽こびきぶし。何でもうたふし、祖父以来進歩党時代からの国会議員に力ちから※いれて、りゆう心おもう和尚から草稿をかいてもらつて政談演説をしたり、劍術に凝り、植木に凝り、和讃に凝り、念仏に凝り、また穀断こくだち、塩断しほだち

などをもした。

僕のやうな、物に臆し、ひとを恐れ、心の競ひのすくないものが、
 たまたま父の一生をおもひ起すと、そこにはあまりにより似寄の無いこ
 とに気付くのであつたが、けれどもこれ是は自ら斯かう思ふといい。僕
 は父が痰たんを煩つたときの子である。生薑しやうがの砂糖漬などを舐ねぶつて
 ゐたときの子である。さういふ時に生れた子である。ただ、どち
 らにしても馬胎ばたいを出いでて驢胎ろたいに生じたぐらゐに過ぎぬとは僕もお
 もふ。

8 青根温泉

父は五つになる僕を背負ひ、母は入用の荷物を負うて、青根温泉に湯治たうぢに行つたことがある。青根温泉は蔵王山を越えて行くことも出来るが、その麓ふもとを縫うて迂回うくわいして行くことも出来る。

父の日記を繰つて見ると、明治十九年のくだりに、『八月七日。雨降。熊次郎、おいく、茂吉、青根入湯ゆくに行。八月十三日、大雨降り大川の橋ながれ。八月十四日。天気吉よし。熊次郎、おいく、茂吉三人青根入湯返りがへ。八月廿三日。天気吉。伝右衛門でんゑもん、おひで、広吉、赤湯入湯あかゆに行。九月朔ついたち。伝右衛門、おひで、広吉、赤湯入湯かへる』。ここでは、父母が僕を連れて青根温泉に行つたことを記し、ついで、祖父母が僕の長兄を連れて、赤湯温泉に行つたことを記してゐる。父の日記は概ね農業日記であるが、かういふ

事も漏らさず、極く簡単に記してある。青根温泉に行つたときのことを僕は極めて幽かかすにおぼえてゐる。父を追慕してゐると、おのづとその幽微になつた記憶が浮いてくるのである。

父は小田原 提ちやうちん 灯 か何かをつけて先へ立つて行くし、母はそ

の後からついて行くのである。山の麓の道には高低いろいろの石が地面から露出してゐる。石道であるから、提灯の光が揺いで行くたびにその石の影がひよいひよいと動く。その石の影は一つ二つではなく沢山にある。僕が父の背なかで其それを非常に不思議に思つたことをおぼえてゐる。

まだ夜中にもならぬうちに家を出て夜通し歩いた。あけがたに強雨がうらうが降つて合羽かつぱまで透した。道は山中に入つて、小川は水嵩みづかさ

が増し、濁つた水がいきほびづいて流れてゐる。川幅が大きくなつて橋はもう流されてゐる。山中のこの激流を父は一度難儀してわたつた。それからもどつてこんどは母の手を引かへて二人して用心しながら渡つたところを僕はおぼえてゐる。それから宿へ著くとその庭に四角な箱のやうなものが地にいけてある。清い水がそこに不断にながれおちて鰻がうなぎ一ぱい泳いでゐる。そんなに沢山に鰻のゐるところは今まで見たことはなかつた。

帳場のやうなところにある女は、いつも愛想よく莞爾にこにこしてゐるが、母などよりもいい著物きものを著てゐる。僕が恐る恐るその女のところに寄つて行くと女は僕に菓子を呉れたりする。母は家に居るときには終日忙せはしく働くのにその女は決して働かない。それが

童子の僕には不思議のやうに思はれたことをおぼえてゐる。

僕は入湯してゐても毎晩夜尿ねねうをした。それは父にも母にも、もはや当りまへの事のやうに思はれたのであつたけれども、布団のことを氣にかけずには居られなかつた。雨の降る日にはそつとして置いたが、天氣になると直ぐ父は屋根のうへに布団を干した。器械体操をするやうな恰好かつかうをして父が布団を屋根のうへに運んだのを僕はおぼえてゐる。

或る日に、多分雨の降つてゐた日でもあつたか、湯治客たうちぎやくがみんなして芝居の真似まねをした。何でも僕らは土戸つちどのところで見物してゐたとおもふから、舞台は倉座敷であつたらしい。仙台から湯治に来てゐる媪おうななども交つて芝居をした。その時父はひよつと

こになつた。それから、そのひよつとこの面めんをはづして、囃はや子手してのところで笛を吹いてゐたことをおぼえてゐる。

父の日記に拠よると、青根温泉に七日わゐた訣けである。それから、

明治二十丁ひのとみ亥年六月二日。晴天。夜おいく安産。と父の日記にあつて、僕の弟が生れてゐるから、青根温泉湯治中に母はくわいに懐妊んしたのではないかと僕は今おもふのである。

9 奇蹟。日記鈔

不思議奇蹟などいふことは中江兆民には無かつた。それは開化を輸入するには物質窮理の学を先づ輸入せねばならぬから、兆民

は当時『理学』と謂つてゐる哲学をも輸入したが、いきほひ『奇蹟』を対治する立場にあつた。けれども僕のやうな氣の弱いものには、『奇蹟』は幾つもある。

大正十三年の暮に火事があつて、僕の書籍なんどもあんなに焼け果ててしまつたのに、僕が郷里から持つて来て、新聞紙に一包にしてゐた祖父と父の覚帳おぼえちやうが煙にこげたまま焼けずにゐた。びしよぬれになつてゐた日本紙で綴つた帳面を一枚一枚火鉢の火で乾かしながら、僕は実に強い不思議を感じてゐた。僕の甥は、紙を乾かすのを手伝ひながら、『軽いものですから、二階の焼落ちるときに跳ね飛ばされたんでせう』などと云つた。また『被ひふく服しやう廠やうの時のやうにつむじ風が起つて吹き飛ばしたのかも知れま

せんね』『併しかしあんなぺらぺらな紙の帳面ですから、直ぐ焼けてもいい筈はずですがね』などとも云つた。甥はなるべく物理学の理屈で説明をつけようとするのであるがそれでは分からない点が幾らもあつた。

祖父のものは、俳諧はいかい連歌れんがか何かを記入したものであつたが、

父のものには、『品々しな万よろづ書かき留とめ帳ちやう』といふ、明治七甲き

のえいぬ

戌こしら年二月吉日に拵こしらへたものである。これは長兄が生れたとき、

いはひもら

祝いはひに貰つた品々などの記入から始まり、法事の時の献立こんだて、病氣

見舞の品々、婚礼のときの献立など、こまごまと記しるしてあるので、

僕は珍しいと思つて貰ひ受けたのであつた。例へば、明治廿三年

二月廿三日夜より廿四日。盛華院清阿妙浄善大姉三回忌仏事献立

控の廿四日十二人前まへの条くだりに、平（かんぴよう。いも。油あげ。こんにやく。むきたけ）。手しほ皿（奈良漬。なんばん）。ひたし（蕪にら）。皿（糸こん。くるみ合）。巻ずし（黒のり、ゆば）。吸物（包ゆば二つ。しひたけ。うど）。あげ物（牛蒡ごぼう。いも。かやのみ。くわい。柿）。煮染にしめ（くわい。氷こん。にんじん。竹の子。しひたけ）。手しほ皿（焼とうふ。くづかけ。牛蒡黒煮）。皿（うこぎ。わらび漬）。下あげもの（くわい。牛蒡。柿。かやのみ。赤いも）。大平おほひら（くわい。しひたけ。ゆづ）。汁（とうふふのり）。茶くわし（せんべい）。引くわし（うんどん五わただし但四ただし十めたば。まんぢゆう七つ但一つに付四厘づつ）。こんなことが書いてある。これで思おもひおこ起すのは、陰暦の二月すゑには、既に

葦が萌え、木の新芽が饌せんに供し得る程になつてゐるといふことである。それから、『わらび漬』などもあるのも少年の頃をしのばしめるのであつた。

その父の帳面に、僕が生れた時祝に貰つた品々を記した個所があるから一寸書ちよつととどめておきたいと思ふ。明治十五年みづのえうま壬午年

三月廿七日しゆつしやう出生。守谷もりや茂吉義豊。安産あんざん見舞受帳。小王余

魚七枚、菅野やぶ弥五ゑもん右衛門。金二十銭外に味噌一重、金沢治右衛門。

金十銭、鈴木庄右衛門。金十銭、鈴木作兵衛さくべゑ。金十銭、斎藤三郎

右衛門。鰹かつをぶし一本外に味噌一重、永沢清左衛門。焼かれい三枚、

松原村山本善十郎。金五銭、斎藤富右衛門。金十銭、大沢才兵衛。

以上である。同じ村から八軒祝を貰つてをり、他村から一軒貰つ

て居る。他村の松原村と記してあるのは、母の姉が嫁入つたところである。それから最後に、大沢才兵衛とあるのは、父の弟で、漆の芽で僕の腕に小男根を描いてくれた童子の父である。明治十五年頃の東北の村ではこんな程度であつた。

僕は留学から歸つて来て、家兄に頼んで少しばかり父の日記から手抄して貰つたのであつた。そのうちに僕にぜに銭を呉れたのを記したところが処々に見つかる。明治十九年十月十五日曇り。二錢柿代富太郎、茂吉え遣し。つかは明治二十年七月十五日。四錢茂吉え遣し。明治廿三年正月七日。十八錢、茂吉授業料正二二ヶ月分。三錢茂吉え遣し。十日休日。三錢茂吉え遣し。十五日休日。一錢茂吉え遣し。七月二日。五錢茂吉書物代。しよもつだい十二日。四錢茂吉え遣

し。十二月廿四日。二十二銭茂吉薬代くすりだい。こんな工合である。ここに二十二銭茂吉薬代とあるのは、僕が絵具に中毒して黄疸わうだんになつたとき、父は何処どこからか家伝の民間薬を買つて来てくれた。それを云ふのである。

明治廿四年。二月十五日。一銭直吉笛代。五銭富太郎え遣し。

三銭茂吉え遣し。三月三日。二十銭茂吉書物代画学紙共。十五日。

一銭茂吉え遣し、廿八日。二銭茂吉え遣し。八月十四日。天气吉よし。

茂吉直吉おみゑかみのやま上山行。九銭茂吉筆代。十月廿一日。天气吉よし。

七銭茂吉下駄代げただい。廿二日。天气吉。広吉茂吉は半郷学校え天子様てんし

のシヤシン下るに付ついて而行ゆく。熊次郎紙つき。富太郎金三郎深田の

葦刈よしかり。女中三人は午前菜なつけ。午後裏うらはた畑くきとり草取。伝太郎たのんを頼

で十一俵買。

合併になつた隣村の学校に、御真影ごしんえいがはじめて御さがりになつた時の趣で、それは明治廿四年十月廿二日だつたことが分かるが、これはすべて陰暦の日附である。大雪にならぬ前に深田の葦を刈り、菜を漬け、畑の草を取つて播まくべきものは播き、冬ごもりの準備をする光景である。父の日記は、大凡おほよそ農業日記であつて、そのなかに、ぽつりぽつり、僕に呉れた小遣こづかひせん銭の記入などがあるのである。明治廿二年の条くだりに、宝泉寺え泥ぼう入はひり、伝右衛門下男げなん刀持もちて表ゆくより行。熊次郎やしもち槍持やしもちて裏りゆうより行、などといふ事件の記事もある。これは、宝泉寺住職りゆうおう 応おう 和尚が上京して留守中、泥棒が入らうとして日本刀で戸をずたずたに切つた。 偏くつきや

強^うの若者が二人ばかり宿^{とま}つてゐたが、恐れてしまつて何の役にも立たなかつた時の話である。伝右衛門は祖父の名で未だ存命中であつた。熊次郎は父の名である。

一時劍術に凝つたり、砲術を習つたりした名残^{なごり}で、どちらかといへば、さういふ時に槍など持つことを好んでゐた。父はさういふとき『得手^{えて}まへ』といふ言葉を好^よく使つた。

10 念珠集跋

「念珠集」は、所^{しよせん}詮『わたくしごと』の記に過ぎないから、これは『秘録』にすべきものであつた。それであるから、僕の友よ、

どうぞ怒いからずに欲しい。

ミュンヘンに留学中は、主に実験脳病理学のことをやつた。少い暇に読む書物も、それから考へることもさういふことが主おもになつてゐた。[ischa:mische Zellvera:nderung] といふやうなこと、

Kolliquations-Nekrose とか、 koagulierende Nekrose とか、例へばさういふ概念が頭を領してゐるのであつた。そのまた暇に僕は心理書を読んでみた。Hylopsychismus といふことだの、Zerlegung der Gignomene とか、Unbewusstheit der Reduktionsbestandteile とか、いふことだの、さういふことが頭を悩ましたのであつた。

ところが、僕の下宿はきんに馬琴ばきんのものが置いてあつた。もう古びて、何なん代だいもの留学生が異郷の寂しさをそれで紛らしたといふことを

証拠立ててゐた。馬琴のものなどはこれまで読んだことのない僕が、ある時ふとそれを読んでみた。久遠くをんのむかしに、天竺てんぢくの国にひとりの若い修行しゆぎやう僧が居り、野にいでて、感ずるところありてその精せいを泄もらしつ、その精草の葉にかかれり。などといふやうなことが書いてあつた。僕は計らずも洋臭を遠離をんりして、東方の国土の情調に浸つたのであつた。さういふ心の交錯のあつたときに、僕は父の訃音ふおんを受取つた。七十を越した齡よはひであるから、もはや定命やうみやうと看ても好いとおもふが、それでもやはり寂しい心が連日湧わいた。夜の暁あけがた方などに意識の未だ清明せいめいにならぬ状態で、父の死は夢か何かではなからうかなどと思つたこともある。併しかし目の覚めて居るときには、いろいろと父の事を追慕した。それは尽ことごと

く東海とうかいの生れ故郷の場面であつた。「念珠集」は所詮、貧しい記録に過ぎぬ。けれどもさういふ悲しい背景をもつてゐるのである。僕を思つてくれる友よ。どうぞ怒いからずに欲しい。

大正十四年八月に、比叡山ひえいざんのアラギ安居会あんどくわいに出席して、

それから先輩、友人五人の同行どうぎやうで高野山かうやさんにのぼつた。登山

自動車の終点で駕籠かごに乗らうとした時に、男が来て北室院といふ

宿坊しゆくぼうを紹介してくれた。それから豪雨の降るなかを駕籠で登

つて宿坊へ著いた。そこに二晩宿りとま、貧しい精進しやうじん料理を食つ

た。饅頭まんぢゆうが唯ひとつ寂し相に入つてゐる汁で飯を食べたこと

などもある。而してそ、そこで勧められる儘ままに、父の追善つみぜんのため

に廻向ゑんかうをして貰もらつた。その時ふと僕は父が死んでからもう三回忌

になると思つたのであつた。

本来からいへば七月に三回忌の法事をするのであるが、稲作いなさくの為事しごとが終へてから行ふことになり、八月、九月、十月と過ぎて、十月のすゑに行つた。けれども僕は東京の事情に礙さまたげられて列席することが出来ないのです、そのことをも僕はひどく寂しくおもつた。法事終へてから家兄が父の小さい手帳を届けて呉れた。これは大正四年に西さいこく国に旅たびした時の父の日記である。

五月六日。旧三月廿三日。天気吉よし。吉野町より、朝六時吉野山のぼり、午前十一時吉野駅発。高野かうやぐち口駅え午後一時三十分著。

是これより五十丁つめ三里高野山え上り、午後八時頃北室院に著。一円、吉野町宿料払。五十銭、吉野山見物車くるまちん。五十銭、同所寺

に参詣費。三十銭、吉野口駅より高野口駅迄切符代。五十銭、昼飯料。二円六十銭、籠かごに乗賃払。七円五十銭、日ばい料北室院に上げる。

五月七日。旧三月廿四日。晴天。朝の八時より参詣いたす。総参詣人一日へいきん二万人以上あるよしづつ有由。午後一時より高野山より下り高野口駅え午後四時に著。是より粉河駅こかはえ著。かなも館支店宿泊。一円、参詣費。一円五十銭、北室院宿料。五十銭、荷物負おひち賃。一円、途中小使。五十銭、昼飯料。五十銭、車くるま賃。四十銭、汽車賃。

これを見ると、父は十年前に高野山にのぼり偶然にも北室院に宿泊して、宿料が一円五十銭なのに、日牌料につばいれう七円五十銭も上げ

てゐる、これは、僕の母のために供養くやうして貰つたのに相違ない。母は大正二年に歿ぼつしたのだから、大正四年は三回忌に当る都合である。父の日記に拠よると、高野山を半日参詣して直ぐすその午後には下山して居る。仏法僧鳥ぶつぽふそうを聞かうともせず、宝物ほうもつも見ず、大門の砂のところからのびあがつて、奥深い幾重の山の遙か向うに淡路島あはぢしまの横よこたふのも見ようともせず、あの大名の墓石ぼせきのごたごたした処を通り、奥の院に参詣して半日つぶして直ぐ下山して居る。道中自慢であつた父も、その時は既に六十四五歳になつて居り、四十歳ごろから腰まがが屈まがつて、西国さいこくの旅に出るあたりは板に紙を張りそれを腹に当てて歩いてゐた。さうすれば幾分腰が延びていいなどと云つてゐたのだから、高野の旅なども矢張り難儀であつ

たらうと僕はおもふ。そして、僕らが食べたやうな、汁の中にし
よんぼりと入つた 饅頭まんぢゆうを父も食べたのだらうとおもふと、何
だか不思議な心持にもなるのであつた。これを「念珠集」の跋ぼつと
する。（大正十五年二月記）

青空文庫情報

底本：「斎藤茂吉選集 第八卷」岩波書店

1981（昭和56）年5月27日第1刷発行

初出：「改造」

1925（大正14）年11月、1926（大正15）年4月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：kanille

校正：門田裕志、小林繁雄

2005年1月7日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

念珠集

斎藤茂吉

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>